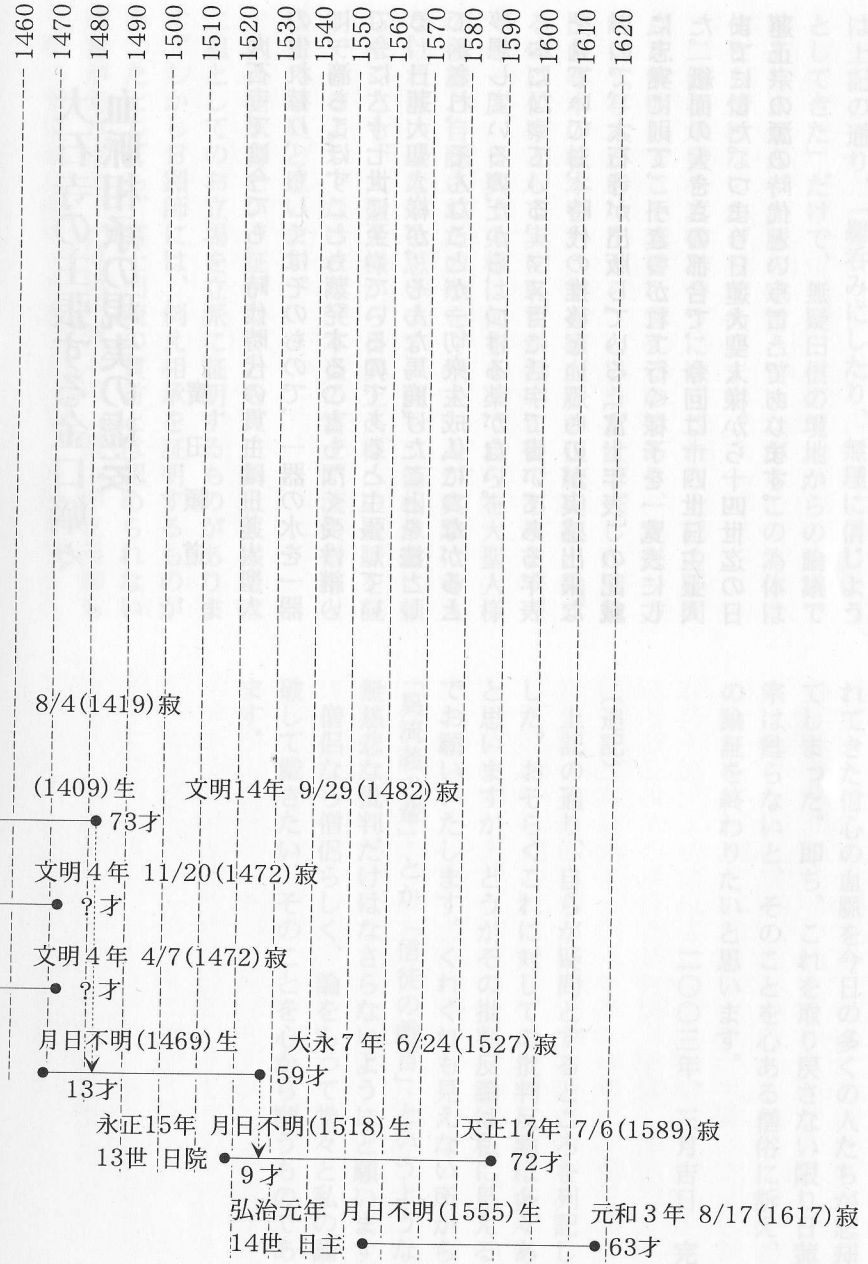
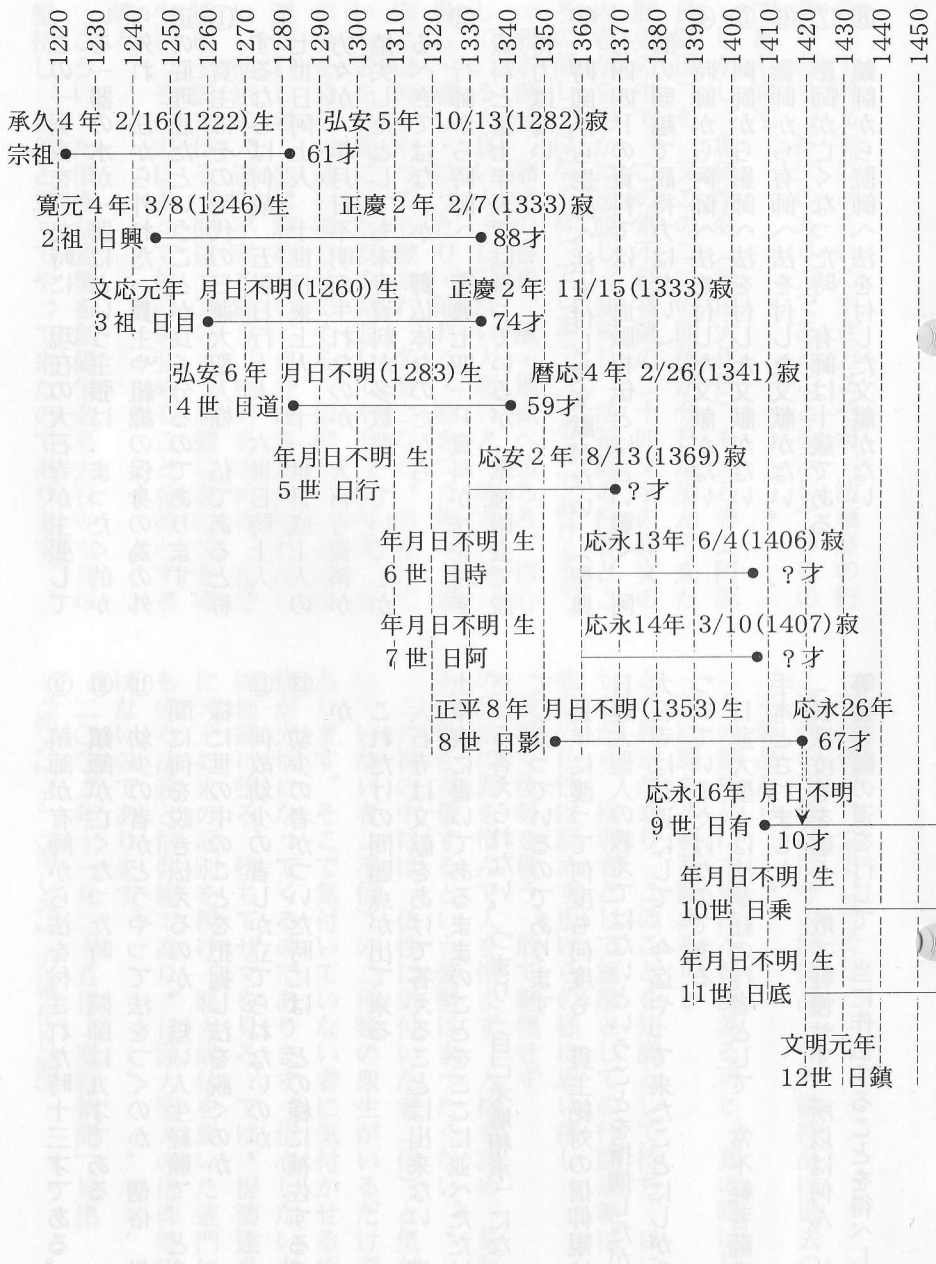


# 大石寺の主張する金口嫡々 血脈相承の現実の虚妄

廣田 頼道

大石寺では今でも、時代時代の貫主は日蓮大聖人の生れ替り、もしくはそのもので、一器の水を一器に一滴もこぼすことも蒸発することもなく受け継いで今に六十七世に至っているのであると主張している。日蓮大聖人様が、そんな馬鹿げたことを法として示され、そんなことが一切衆生成仏につながると思夢想しているのだから、つける葉がない。

本になっている、マス目に活字で書いてある年表を見ていても、時代の推移というものが実感出来ないのです、大石寺が出版している「富士年表」の記載に忠実に則て、引きつがれて行く様子を一覧表にしました。紙面の大きさの都合で、今回は十四世日上人までにした。つまり日蓮大聖人様から十四世迄の日蓮正宗の源の時代ということであります。



この一覧表を見た時に、現在の大石寺が主張している一器の水が一器にという主張は、まったく的から外れ、法から外れた、貫主や組織の保身の為の外道の屁理屈だということが良く分るのであります。

① 貫主はその時代の日蓮大聖人様。仏であるとするならば何故、五世日行上人、六世日時上人、七世日阿上人、十世日乘上人、十一世日底上人の方々が、年月日不明の生れなのか。大石寺資料が焼失したとしても末寺資料が多数残っていてしかるべきではないか。御仏体なのだから。

② 行師から時師へ、聖典七四一P資料が法を付す資料と富士年表では扱っているが、牽強附会で説得力はない。

③ 時師から影師へ法を付した文献がない。(聖典七四四Pの資料では、血脈相伝とは言い難く、阿師の頭越で説得力はない。)

④ 時師から阿師へ法を付した文献がない。

⑤ 阿師から影師へ法を付した文献がない。

⑥ 影師から有師へ法を付した文献がない。

⑦ 影師が亡くなった時、有師は十歳である。

⑧ 鎮師から院師へ法を付した文献がない。

⑨ 鎮師が有師から法を付された時十三才である。

⑩ 鎮師が亡くなった時、院師は九才である。

⑪ 幼少の者がどうやって法をつぐのか。僧俗、世間に何を説き伝えるのか。短い人生経験で、どの様に世の中のことを把握し法を説くのか。

⑫ 何故幼少の者しか立てられないのか。

⑬ 幼少の者がついた時には、どの様に補佐するか。

これだけの問題点が出て来る。

大石寺は文献をあげて答えることは出来ない。富士年表に書いてあるままのことをここに並べただけだから答えられない。つまり「自己矛盾相承」になっ

てしまっているであります。

長年に渡って何度も何度も、貫主絶対の信仰観は日蓮大聖人の教えではないということ指摘したが、大石寺は頑迷にして、今迄やって来たことにしがみついているだけなのである。

日蓮大聖人は法華經の行者として、常不輕菩薩を  
手本とされました。

「我深汝等を敬う、敢て輕慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」

の二十四文字に示された生き方こそが、法華經の行者であり、折伏のあり方であることを示しているのであります。

しかし、創価学会（池田大作氏）も大石寺（阿部日顕氏）も、又この二つの団体が今日迄歩んで来た歴史の中で、この常不輕菩薩の二十四文字の經文の内容から明かに逸脱し、変質し、法華經の行者どころの話ではなくなつてしまつているのであります。

邪宗撲滅、邪宗の害毒、敵・地獄へ堕ちろ、信心している人良い人・してない人悪い人、味方・敵、脅し・謙し・はつたり・陥れる・嘘をつく等々。邪宗には何をやつても赦され、名誉となる。信心している者を馬鹿にした奴を見返してやる、三年後、五年後を見ろ、這い蹲らせてやる。信仰している者は選ばれし者、他は認めない。自分達さえ良ければいい、他宗の人達の不幸を願う。権力を求める、自分達の王国を作る。間違つていようが強い者につき寄生し、その力によつて信心を弘めることを善とする等々。

こういつた傲慢な姿勢を創価学会も大石寺も長年堅持し、当然と思つてやつて来たのであります。

「寺泊御書」（全九五三P）

過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり

今の勸持品は本来は不輕品為る可し、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為る可し

との教示があり、このことを知識として持ち、口にしながら、指導者として組織としての行動規範は、他宗の仏性は認めず虫けらの様に思い接し

我深く汝等を敬う、敢て輕慢せず

の謗法の罪を憎んで人を憎まず、人格を認め、具わる仏性を尊敬するという姿勢はまつたかない。

この世の中には、仏性に気付いた者（信）と気付いていない者（不信）の二種類の衆生がいるだけあります。そこで気付いていない者に気付かせる折伏が大切になつてくるのであります。信心しない者は地獄に墮ろ、墮ちてザマを見ろ、では、提婆達多に天王如来の記別を授け、悪人成仏を説いた迹門にも劣る法義と信仰觀であり、日蓮大聖人の信仰等ではないのであります。

二〇〇二年十一月二十五日「聖教新聞」見出  
「妬み」と「憎しみ」の権化日顕

二〇〇二年十二月二日「聖教新聞」見出

「日蓮は幼稚な嫉妬病の権化」「宗門は獸の巢窟」、  
応じる大石寺の「大白法」「慧妙」の見出しも、同  
様の憎しみのなすりつけ合い状態であります。不軽  
菩薩の精神など双方、木端微塵の状態であります。

要法寺から貫主を招くまでの十四世日主上人まで  
の宗祖から四百年経過しただけの間に、十三項目の  
問題点があり、大石寺は他門からの示摘にも無視し  
て「不相伝の輩」を連呼しているのであります。

貫主というものは、法を未來に継ぐ為の機関であつ  
て、法そのものの主権ではありません。法が厳然と  
あり、日蓮大聖人が法華經の行者として悟り、衆生  
に示す。衆生の中で、時代の代表として選ばれた貫  
主は、日蓮大聖人を手本として、法華經の行者とし  
て信仰することとはどういふことを伝えます。  
それこそが相承であり、血脈であります。

一切衆生の仏性、

汝等皆菩薩の道を行じて当に作仏することを得べ  
し

を否定し、貫主一人が法の全てを所持するとか、貫

主そのものが法であると矛盾を強言するならば、

日蓮は即ち不軽菩薩為る可し

の金言により考えた時、時の貫主は不軽菩薩の生き  
様を否定し、かつ、不軽菩薩を踏みにじる大馬鹿者  
ということになってしまふのであります。

法華經の行者として生きるということが、末法の  
成仏であり、血脈、相承の本質なのであります。そ  
んなものだったら重々しくないじゃないか、おごそ  
かじゃない、神秘的じゃないと思う人がいると思  
うが、仏法は一切衆生成仏の為に説かれているもので  
あつて、そんなことの為にあるものではないのであ  
ります。

宗教乱立の中で、法華經の行者は日蓮大聖人だけ  
であり、六老僧はじめ多くの弟子の中で法華經の行  
者は日興上人、日目上人だけだったのであります。

そして、日興上人は二ヶの相承を五老僧にも日目  
上人にも他の僧にも披露していません。しかし、法  
華經の行者として、生身の生き方を持つて、日蓮大  
聖人の本因妙の法を示したのであります。ござかし  
い文章や文献で、免許皆伝の巻物の様に、それを持っ  
ているから法華經の行者、持つていなければ法華經

の行者ではないということはないのであります。

大石寺貫主相承の系譜があまりにも無防備で矛盾に満ちて、十才で日有上人が九世を名乗ろうが、十三才で日鎮上人が十二世を名乗ろうが、九才で日院上人が十三世を名乗ろうが、たくさんの後見人が法華経の行者として、法華経の行者を育てた系譜こそが、大石寺の本来の相承であり血脈であったのであります。血脈相承は、一切衆生の仏性に差別区別なく、平等に抱かれているのであります。

創価学会はもちろんのこと、日顕氏を貫主とし血脈相承を怒声に載せて主張している大石寺も、不軽菩薩の

一切衆生の仏性に対する尊敬と、自身の他に対する軽慢の自省

一切衆生が法華経の行者として等しく成仏することを認め、肯定し、歓喜すること

このことから外れて、何を相承したというのか。どうして成仏するといふのか。貫主を自称して二十余年、憎悪の心と猜疑の心をぶつけあう恥辱にまみれたヒステリックな年月であり、不軽菩薩の教えから遙かに遊離し忘却し、相承の有無を問うも虚しい

生き方を見せてくれた。しかしあなたでも仏性があ  
るのだから、元氣を出して余生、氣を取り直して  
我深く汝等を敬う、敢て軽慢せず

所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、  
当に作仏することを得べし

を憶持してもらいたい。

日顕氏を取り巻く僧侶も、自分の生活保持の為に  
日顕氏を仏に祭り上げる愚行を反省し、不軽菩薩の  
振舞にこそ、真の大石寺法門であることに目醒めて  
頂きたい。